

『ちくま評論選』解説

15 物と身体 前田英樹

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。
- 2 ▽は、本文の追跡・分析。(解答例だけではなく、ここをこそ、読む。)
- 3 ▼は、読解に関する技法。
- 4 ☆は、記述に関する技法。

■読解問題 字数目安 1 二〇〇字 2 二二〇字 3 一五〇字

■前提 『現代文キーワード』で知識を押さえよ。(後から読んでもよい)

- ・「哲学・心理」の概論や「心身二元論」の項目。
- ・さらに「第2部頻出テーマ編」の「身体論」も関係する。

■追跡

① 物が在ることを否定する人たちが、今も昔もこの世の中にはいる。特に哲学と呼ばれる領域に住む人たちに、それは多いようである。けれども、物が在ることを肯定し、信じる立場から、私たちの考えを進めていくとしよう。

▽いきなり「え？」と思った人もあるはず。「物は存在しないって？」。ぜひ、『現キ―』の「哲学・心理」の章を通読してもらいたい。物(客観的な外界)の存在は疑わしい、というのが、近代哲学の出発点だった。知覚していること(主観)と客観はどのように一致するのか、が、哲学のメインの問いだった。根本には、「確かなこと」を求めたいという欲求がある。自分や世界を確かに捉えたい。(神)を盲目的に信じる、というのではなく、自分の明晰な理性によって確かさを捉えたい――。

主客の一致という問いが、主観の方に極端に傾いたとき、実在するのは、私の意識だけ、という「独我論」にいきつく『現キ―』に項目あり)。今見ている世界が、夢か夢でないかなんて区別できない。他の人(と私が思っている人)も私と同じように世界を見ているとは限らない。確かなのは私の意識に映っているもの・ことだけ。…という具合。

今回の論は、そういう独我論的な方向を否定しようとする話だということがわかる(前提としての知識は大事やね)。

② この場合、物とはこの鉛筆であり、消しゴムであり、机であり、庭に生えている樹である。これらは、物体とか物質とかも呼ばれる。こういう物が在ることを否定するとは、狂気の沙汰ではないか、物が在るのは、あまりにわかりきったことではないか。そう思うのが生活者である。私たちは生活者であるから、まずはこの種の常識から出発してみることにしよう。

▽ふつうの「生活者」(哲学者ではなく、って含意やな)にとって、確かなことⅡ「物が在るのは、あまりにわかりきったこと」という常識から考えをスタートしてみようというわけだ。(でも、この、確かなことからスタート、というスタンス自体は哲学や数学と同じものだね)

③ すると、すぐに次のようなことが考えられる。消しゴムが在る、と言えるのは、それを私が手に取って鉛筆の字を消し消すことができるからだろう。手のひらや紙の上に感じられる消しゴムの抵抗は紛れもない。私が手に取れるこの(物)は、在るに決まっている。けれども、消しゴムを手に取って、消し消す字を消したりするのは人間だけである。たとえば、ナメクジはそんなことはない。床から机の上へと這っていくナメクジにとって、ここにある消しゴムは、身体が接触する平面の延長上にある。床や机は、這っていくナメクジの腹に、変化する無数の質感を与えていくが、消しゴムという物体は、その質感の変化のうちに吸い込まれるだろう。つまり、ナメクジにとっては、消しゴムも机も、◆問1ひとつの個体をなすものではない。

④ そんなわけで、消しゴムが在る、という常識は、ナメクジには通用しないことがわかる。机とか、樹とかいう個体についても、同じである。これらの物が、それぞれひとつの個体を成すのは、私たち人間がそう考えたほうが得をするからである。消しゴムや机を使えば便利であり、一本の樹はさらにいろいろと私たちの役に立ってくれる。／ナメクジにとっては、そういうことはない。ナメクジの身体は、たまたまこのものであるから、這うことにとって重要なものだけが知覚される。そこには、消しゴムも机もない、一本の樹という単位もない。あるいは、ナメクジは、私たちが個体とはしないもつと微細なものを、たとえば樹皮のほんのわずかな突起を個体として扱っているかもしれない。

▽「消しゴムが在る」の根拠は何か。それは「消しゴムの抵抗」である。ゴシゴシすると、消したかった汚い字が消える。役に立つ。だから、私たちは「消しゴム」が在る、と考えるのだ。…という議論。

一方、ナメクジはゴシゴシできないし、する必要もない。だから、「消しゴム」という「単位」も、ナメクジにとっては存在しない。

◆問1「ひとつの個体をなす」とは？

個体とは、「消しゴム」といった、ひとかたまりの単位のこと。何かの役に立つ(意味を持つ)、ひとかたまりの単位。ここで「分節」を思い出した人はえらい(『現キ―』「言語」)。「消しゴム」という名付けは、字を消すのに役立つ(意味を持つ)、ひとかたまりの単位に対して行われる。だから「消しゴム」は、「輪ゴム」や「チョーク」とは違うものとして区別される。人間は言語を使うから、それによって世界を分節し(区切り)、世界を役に立つもの、意味のあるものとして捉えるわけだ。

(解答例)「物を意味のあるひとかたまりの単位として捉えること。」

⑤ では、消しゴム、机、樹木といった物体は、人間の都合で勝手に考えられている

だけで、ほんとうは無いものなのだろうか。在るのは、そういう捉え方、知覚の仕方だけののだろうか。こう考えれば、たちまちわけがわからなくなってくる。【◆読解問題1】哲学者流の認識論の罫は、いつもこうした迷路で口を開いている。

▽どこから、へんになったのかな？ そう、ナメクジを持ち出したところからだ。ナメクジには「消しゴム」は無い。なぜか。ナメクジには、「消しゴム」という単位が知覚できないから。すると、「ある」「ない」を分けるのは、「知覚」か。「知覚」がすべてなんや！ …とこう、(思考)は進んで行くわけやね。「知覚(意識)」がすべて——これが行きつく果ては、そう、あの「独我論」。書き手が、最初に否定しようとしていた、あれじゃん。また、元に戻ってきた？——これが、迷路。んー？ どこがま

⑥ 消しゴムは在る、とはっきり考えたほうがいい。そもそもこれが在ることへの、私たちの◆問2根深い信頼はどこから来るか、このことこそ大事な点だ。私たちは、Aこれを使って字を消せる。消しゴムが存在しなければ、そんなことはできない。だから、私たちは消しゴムが在ることを疑わないのである。しかし、それを疑わないとは、自分の身体を、B身体による行動の現実性を疑わないということでもある。消しゴムで字を消せと消している今の私は、決して夢など見ていない。夢から醒めて、あれは夢だったかと思うのは、◆問3夢と現実との違いを私たちがすでに充分知っているからではないか。

▽「消しゴム」が確かに存在する、と疑いようもなく、感じる根拠は何だ？ 筆者は、問いを変えた。存在する、という前提は崩さないままの問いだ。「消しゴムが在る」という常識が、ナメクジに通用しないのはなぜ？ という問いは、迷路へ入り込んでしまうから。
筆者の答えは、「消しゴムを使って字を消せる」から。
消しゴムで字を消せと消している、自分の身体、その動きは、決して夢ではない。現実だ。A字を消せるから在ることを疑わない。B身体による行動の現実性を疑わない。在ることへの信憑の根拠は、身体が握っている。

◆問2「根深い信頼」が生まれるのはなぜ？
☆傍線を延長して、「消しゴムは在る、とはっきり考えたほうがいい。そもそもこれが在ることへの、私たちの根深い信頼はどこから来るか」を問う。つまり、「消しゴムが在ることへの、根深い信頼が生まれるのは、なぜ？」を問う。
(解答例1)「消しゴムを使って字を消せるから。」(Aのみ。やはり、足りない)
(解答例2)「消しゴムを使って字を消せるし、また、消すという行為の現実性も確かだから。」(A+B)

⑦ 物が在ることは、身体が知るほかに現実である。ドアをあけずには、部屋の外へは出て行けない。部屋から出て行くとする私にとって、ドアは除去すべきひとつの障害であり、抵抗である。したがって、物が在るとは、私たちの身体にとって、行

動上のさまざまな障害が現れるということと同じになる。物は、精神によって認識されたり判断されたりするから、(在る)とわかるのではない。物は、何とかしなくてはならない障害として、いつも身体の行動に対して現れてくる。それは、どの生き物にとっても同じだ。

⑧ 確かに、物の絶え間ない抵抗ほど、身体にとって当たり前なことではない。土の抵抗がなければ歩くことができず、水の抵抗がなければ泳ぐことができない。物は、行動する身体にとって、障害であると同時に支えでもある。二つは同じ事柄だろう。夢を見る時には、何よりもこうした抵抗が欠けている。夢のなかで、私たちは一瞬で何百キロの距離でも移動したりしている。夢に欠けているのは、物であり、身体であると言える。もつとも、夢のなかで、足がやたらに重くて歩けない、というようなことがある。その時には、たとえば布団が、寝ている身体の寝返りを邪魔しているのである。障害は夢のなかにあるのではない、現実のなかだけにだけある。

▽「物は、精神によって認識されたり判断されたりするから、(在る)とわかるのではない」というところは、この筆者の考えの独自性のはっきり出ているところ。感覚↓知覚↓認識↓判断という、(脳)(認知・観念)へ続くラインで発想するのが、近代哲学の主流。筆者は、それを、身体(手足…)に根拠づけようとする。

◆問3「夢と現実との違い」とは？

⑧の「物は、行動する身体にとって、障害であると同時に支えでもある。夢を見る時には、何よりもこうした抵抗が欠けている。」の部分を中心にまとめる。対比を意識して。

(解答例)「現実の中では、行動する身体にとって、物は障害や支えとして抵抗を感じさせる。しかし、夢の中では、身体は夢の中の物によって抵抗を感じることはない。」(感じたとしても感じさせる物は現実にはしかない。)

⑨ 物が在ることの現実性は、身体が請け合ってくれる。身体が在ることの現実性は、物が請け合ってくれる。【◆読解問題2】物と身体が噛み合っている限り、私たちは夢など見ていない。逆にこの噛み合いがはずれた時、私たちは夢の状態に陥る。
▽物が在る、ということが、夢ではなく、現実のことだというありありとした感じは、身体が感じさせてくれる。身体が、抵抗を感じる。身体はゴシゴシと消しゴムを使う。字が消えていく。それが「消しゴム」が「在る」ことの証拠だ。それは同時に、身体が現実である証拠だ。抵抗と、その元である物がずれているとき、「ん？ これは夢か？」ということになる(足に鎖も付いてないのに、足がやたらに重くて歩けない、とか、ね)。

⑩ デカルトは、この世の一切が夢かもしれないという疑いから、自分の哲学を始めようとした。想像を超えた邪悪な神さまがいて、絶えず私を夢見させ、私の判断の何もかもを欺いているかもしれない。けれども、自分の疑いそのものは、それほど悪神でさえ消すことができないものではないか。だから、このように疑っている自

分は在る、と見なすよりほかない。在るのは、まず自分である。そして、この自分が在るために不可欠な事柄は、疑うこと、考えることだけになるだろう。自分が在るためには、場所も身体も必要ではない。

▽「倫理」でも習うデカルト。「我思う、ゆえに我あり」は、通常このように説明されるよね。でもこの「想像を超えた邪悪な神さまがいて、絶えず私を夢見させ、私の判断の何もかもを欺いている」というのは、バーチャルリアリティの世界ではありえる話。場所も身体もなく、ネット空間を漂う「私」のイメージが「リアル」になっている現在。余談だけど。

「在る」に身体は必要ない。これがデカルト流（近代哲学流）の発想、という点をおさえる。

⑪ 考えるためには、自分は存在しなくてはならない。このことは、極めて明白に知ることができる。ここからデカルトは、自分によってこれと同じくらい明晰に、かつ判明に知られることは、すべて真である、という結論を導き出す。三角形の内角の和は二直角であること、球のどの部分もその中心から等距離にあること、こうしたことはみな真である。これを知るためには、人は知覚する自分の身体も、知覚される三角の物体とかボールとかをも前提とする必要はない。

⑫ ◆問4「この結論」とは？
指示内容の確認。⑪段落初めの「結論」を整理。▼同じ語句を検索。
(解答例)「考えるためには、自分は存在しなくてはならない」ということは、極めて明白に知ることができるが、「これと同じくらい明晰に、かつ判明に知られること」は、すべて真である、という結論。」

▽「延長」というのは、身体や物の空間的な広がりのこと。それに対して、精神・思考は空間を持つことなく実在する。デカルトは、そう考えた。

◆問4「この結論」とは？
指示内容の確認。⑪段落初めの「結論」を整理。▼同じ語句を検索。
(解答例)「考えるためには、自分は存在しなくてはならない」ということは、極めて明白に知ることができるが、「これと同じくらい明晰に、かつ判明に知られること」は、すべて真である、という結論。」

⑬ 私たちが取ろうとする考え方は、これとは違う。私たちは、生活する者の常識に従って、物はあるがままにそこに在るのだと思う。邪悪な神さまのことなんかは、念頭がない。けれども、すでに見たように、物の姿というものは、私たちの身体がどんな身体であるかに依っている。◆読解問題3 ナメクジと人間とでは、消しゴムは同じ姿をして現れない。では、物に姿を生じさせるこうした◆問5身体とは、何なのか。

▽「私たち」＝筆者と（その考えに沿って考えようとしてくれるはずの）読者は、デカルトのように精神の実在から始めない。物は在る。身体がそう感じているんだから。「身体」こそが物に姿を生じさせる。では、その、鍵になる「身体」の本質とは？

問いが「身体」へ向かう。問5の答えを求めて、⑭へ。定義に当たる箇所をチェックしていく。

⑭ 身体は物の一種であるが、これはA行動する能力を持った物である。行動は単なる運動とは違う。身体は、B外界から受け取った刺激を、その場に適切な行動にして返す。ここが物とは違う点である。ビリヤードの球は、転がってくるもうひとつの球を避けたりはしない。衝突した二つの球は、物理学が規定する法則に合致して、二つの方向に転がる。球が球を避けたり、突き返したりしたら、その球は生きた身体だと言わなくてはならない。

⑮ 私たちの身体とは、まさに外から来るものを避けたり、突き返したりする物体である。ナメクジは転がってくるビリヤードの球を避けたり、突き返したりはできないから、その身体にとって、たぶん球は個体としての姿を取っていない。球の運動は地表面の何か恐るべき変動のようなものだ。けれども、私たちにとっても、ナメクジにとっても、こうした運動が、運動する抵抗物が、現に在ることに変わりはないだろう。生きた身体は、それに直面し、何らかの行動を強いられる。

◆問5「身体」とは？
傍線A Bを合く体。

(解答例)「外界から受け取った刺激を、その場に適切な行動にして返す能力を持つ物。」

⑯ デカルトが考えるような人間は、あるいは精神は、世界の隅で純粋な認識だけを心がけて生きている。もちろん、生活する者は、純粋認識どころの話ではない。石が落ちてくれば、逃げなくてはならず、荷物が廊下を塞いでいけば、何とかしてどけなくてはならない。石や荷物が、「明晰、判明」に精神に現れてくるのを待っている暇はない。物の姿は、右往左往する身体がこの現実に見合っ現れてくる。私たちにあって、物が「在る」とは、まずそれが身体にとって、こんなふうな◆問6「現実的」であることを意味する。

▽なんだか、デカルトを揶揄してるね。こういうデカルト＝心身二元論に対する批判は、定番と言ってもいいようなものになっている。しかし、デカルトの（時代の）切実さに立ち返ってみれば、そして、デカルトの思考の格闘をたどってみれば、また、別の価値がそこにはあると思うけれど。

さて、問6。

☆傍線部延長。「物が「在る」とは、まずそれが身体にとって、こんなふうな（現実的）であること」。☆指示内容補填。「こんなふうな」とは、どんなふうな？ ……という手順。「に」とって」で検索！

⑰ 「私たちにとっても、ナメクジにとっても、こうした運動が、運動する抵抗物が、現に在ることに変わりはないだろう。生きた身体は、それに直面し、何らかの行動を強いられる」↓物は、身体にとつて「である」に書き換え。

(解答例)「物が「在る」とは、身体にとつて、運動に対する抵抗であり、それに直

面したとき実際に何らかの行動を強いられる事態であるということ。」
長くしたければ「意識の中に物が現れてくるということではなく」を挿入することもできる。

■読解問題 (字数目安) 1 二〇〇字 2 二二〇字 3 一五〇字

①「哲学者流の認識論の畏は、いつもこうした迷路で□を開いている」とは？

「こうした迷路」とは何か。

⑤段落の後に書いたことを繰り返すと、

「ナメクジには「消しゴム」は無い。なぜか。ナメクジには、「消しゴム」という単位が知覚できないから。すると、「ある」「ない」を分けるのは、「知覚」か。「知覚」がすべてなんや！…とこう、(思考)は進んで行くわけやね。「知覚(意識)」がすべて——これが行きつく果ては、そう、あの「独我論」。書き手が、最初に否定しようとしていた、あれじゃん。また、元に戻ってきた？——これが、迷路。んー？どこがまずかった？」

これは、ここまで書いてあることをたどって見たものだ。この発想の流れ——すべては知覚だ——が「哲学者流の認識論」。そうやっていくと、「迷路」に陥る、ということなぞればいい。

「知覚」「意識」というスクリーンにどう映るか、という発想をすると、必然的に、外界と内界、客観と主観を隔てる考え方になってしまう。確かに、あらゆる個体は自分の知覚からしか世界を捉えられず、すべてを見渡す神のような視点は持てないから、厳密には疑い出したらきりが無い。しかし、その厳密さを突き詰めていくと、物は存在しないといった、常識に反する(そのままでは生きていけない、生活できない)発想に行き着いてしまう。

解答のポイントは、「知覚できない↓ない」と発想すると、「物は存在しない」という、最初に否定しようとした考えに陥ってしまう、という回路を描くこと。

【解答例】「ナメクジに「消しゴム」が存在しないのは、ナメクジには、「消しゴム」という単位が知覚できないからだと考えると、「ある」と「ない」を分けるのは、知覚できるかどうかということになる。すると、知覚に映るもの(知覚の仕方)がすべてであり、その外の世界に物が在るかどうかは不明だとか、実は存在しないといった考えに至り、いつのまにか、物は存在しない、という常識とは違う結論に陥ってしまうということ。」

②「物と身体が噛み合っている」とは？

直前を使って「物が在ることの現実性は、身体が請け合ってくれ、身体が在ることの現実性は、物が請け合ってくれる」ということ、なんて書くのも手だが、これではよい点数にはなるまい。

現実では「物は、何とかしなくてはならない障害として、いつも身体の行動に対して現れてくる」。しかし夢の中では、身体と物による抵抗にずれがある。

「物は…」と「身体は…」の二つの文で書く、と決める。ひとつは、

A 「物が在るということは、身体が行動しようとするとき、その抵抗として現れてく

る。「これは、「物が実在する」ことを感じるのには身体だ(身体が請け負う・保証することの言い換え。もうひとつは、

B 「身体は、物が抵抗として現れてくるとき、それを現実として感じる。「これは、「これが夢ではなく現実だ」ということを保証するのは、物だ、ということの言い換え。じつはここには二つの条件が重ねられている。「物が在る」+「現実である」。

【解答例】「物が在るということは、身体が行動しようとするとき、その抵抗として現れてくる。一方、身体は、物が抵抗として現れてくるとき、それを現実として感じる。このように物と身体が互いに、「在る」ことと「現実である」ことを保証し合っているということ。」

③「ナメクジと人間とでは、消しゴムは同じ姿をして現れない」とはどのようなことか？

☆端的に考える、なら、「身体の大きさが違うから同じ姿には見えないということ」だよ。大きさだけじゃない、感覚器官も、身体の構造もまるきり違う。あたりまえやん。…というところだが、この文章の主旨に基づいて解答するとすると、どうしたらよいか。

筆者が言いたいのは、人間にとっても、ナメクジにとっても、消しゴムや球は「存在する」ということ。人間には存在するが、ナメクジには存在しないという、あの知覚の畏に陥らない、というところがポイント。知覚の違い、として書くのではなく、その物に対する行動・対応の仕方の違いとして書く。

参照箇所は⑤段落。整理してみよう。

●人間の身体にとっても、ビリヤードの球は、避けたり、突き返したりする物体という姿を取る。

●ナメクジにとっても、ビリヤードの球を避けたり、突き返したりはできない。ナメクジにとって、球は個体としての姿を取らない。表面の変動のような姿だろう。

●けれども、人間にとっても、ナメクジにとっても、球の運動が、現に在ることに変わりはない。

●人間にとっても、ナメクジにとっても、身体は、球の運動に直面し、何らかの行動を強いられる。

【解答例】「人間にとっても、ナメクジにとっても、その身体は、「消しゴム」といった物の運動に直面したとき、何らかの行動を強いられるから、その物が現に存在することに変わりはない。しかし、人間とナメクジでは身体の大きさや構造が違うから、物に対する身体の行動の仕方が異なるということ。」